

2015年6月15日

生産発達の本質

そして恵まれた日本列島から次の社会を

縄文
JOMON あかでみい 山田 まなぶ 学 ©

(文献 56 参照)

※本論は 2011 年 2 月 15 日公開〈生産伝統の本質〉の改題・全面更新です。
やまとことばの声を大切にしたい、旧かなにて書かせていただきます。

解放へ

人間の歴史の暴力の渾沌からひとつの非暴力の秩序が観えました。

日本社会の生産を成熟させていく道は、民間すなはちまうひとつの公共として、人間社会を健康平和化し、諸国家の機能を縮小していく、〈公会創造事業〉こそが、その本質である。わたくしども JOMON あかでみいは、さう考へます。

日本社会について、学界・官界・政界・報道界などの今の権威にとらはれず、ていねいに調査研究すれば、次の社会への準備に恵まれてゐます。認識の転換こそが必須です。

以下に順次、論理的に解説いたします。インターネット内の無名人による、しかし真剣な主張に、どうかおつきあひください。

国家間闘争や、資産増殖に、とらはれてきた。だからこそ、人びとの健康平和と欲求を理性的に解放していくこと、これがなかつた。人びとの意思をこの方向に統一していく、規範と概念の提唱がなかつた。残念ながら、欧米の権威をも含め、今の通念にとらはれてゐては、結局、何も問題は解決しない。わたくしどもは、さう考へるのです。すべてはここからはじまるのではないか。

人間社会人民における、健康平和な現実認識の恋愛・出産・保育・教育・保健・看護・医療への運営・指導は、まだまだ理想であり、現実には無理な部分があります。各種現場の問題を健康平和な現実認識において自主的に解決していくことへの運営・指導は、まだまだ理想であり、現実には無理な部分があります。少しずつ、少しずつ、少しずつ、これらの無理をどう克服していきあひうるか。すべてはここからはじまるのではないでせうか。

〈公会意識〉へ

以上 (保健などや問題解決への運営・指導) は、私的協会と公的協会を介して、行つてまいります。

私的協会とは、家庭といふ協会・同好会といふ協会・職場といふ協会です。

公的協会とは、学問協会・生産協会・道德協会・政治解消協会です。この公的協会について解説するには、論理的な諸準備が必要であり、後述いたします。

家庭とは、恋愛・出産・保育・教育といふ、特殊な労働と、生活の休養面のための、協会です。さう考へます。

同好会とは、職場の分業労働を修正する、保健的な労働や、分業認識を修正する、保健的な認識のための、休養協会です。さう考へます。

職場とは、人間社会人民おたがひの健康平和生活を目的とする、生産調和体へ向け、自由に創造していく。さういふ、生活の労働面のための協会です。さう考へます。

今日の通信・金融・運輸・建築ないし流通の発達により、象徴的にはスマホやコンビニなどの発達により、家族や職場の個々人がばらばらに漂流し始めてはゐないでせうか。この流れを回避することはできません。生活や生産の本質から、あらためて、三種の私的協会として意識的に組み立て直す必要があります。

まづ、生理的な結果としての家族と区別し、その家族の構成に必ずしもとらはれず、家庭といふ協会を、一定の思索や情念を経て、組み立て直さない限り、さまざまな悲劇は無くならないのでないか。慣習や法律や登記の改善も必要です。

なほ、日本民族の伝統と創造を考へる場合は、観阿弥に育てられた世阿弥に象徴されるやう、もののはれの技能の伝統と創造における保育と教育、といふ意味において、家庭を考へる必要もありませう。

次に、かのマルクスは、社会において分業といふものを無くしうるかに、空想したところがあります。資本制社会における分業労働や分業認識といふ、病的生活を克服したかつたからです。社会において分業と協業を無くすことは、現実には無理です。病的生活を克服するためには、職場の分業労働や分業認識を修正する、保健的な労働や保健的な認識のための休養協会を、意識的に設ければよいのでないか。それをこそ、同好会と呼んではどうか。わたくしがかう思ひ至つたのは、ヨガの沖正弘師(1919～1985)に学んだからです。師は、生活の修正法の重要さを、象徴的には姿勢動作と呼吸の修正法の重要さを、強調されました。(文献 19、20 参照)

職場には、私的協会のみでなく、公的協会運営部や公会指導部もありますが、後述いたします。

この数千年間の諸国家闘争史の必然を冷徹に理解しつつ、むしろ民間からまうひとつの公共として、人間社会全体を健康平和化していきあふ。人間社会をひとつの公会として組織していきあふ。

個人個人がしだいにかういふ〈公会意識〉をもちしだいに深めていく。〈公

会意識) ある個人個人が各種現場にてそれぞれなりに生活や生産を創意工夫していきあふ。かういふ意味の諸個人の自立も必要です。

天皇家とお浄土

さて、日本民族の天皇家の伝説にたとへ架空認識が含まれてゐようと、天皇家の伝説があることそのものは現実です。伝説のなかに含まれてゐる架空認識と現実認識を判定していく冷徹な研究も必要でせう。が、日本民族の伝統と創造について、そして諸民族の伝統と創造について、ひろく深く想ひをめぐらす家元、さういふ存在こそは必須でせう。いはば祖先追想道です。天皇家は近代国家の君主ないし象徴としてご苦労されましたが、神武天皇伝説の奈良県橿原市あたりへ帰られ、祖先追想道といふ家元に専念されることも、一案ではございませんでせうか。これからの地方の時代のご象徴としても。それと別に、国家の儀礼外交代表が必要なら、ドイツ国の大統領のやうな制度を、新設してもよろしいのではないでせうか。要は、諸民族調和と諸国家機能縮小の区別と連関、これを考へる、といふことです。

日本民族は縄文時代や弥生時代の先人の素朴かつ深い体内感覚に学び、森林や水流(泉・川・河・沼・水田・池・湖・海岸・内海・外海)の保全を復興させたいものです。土地を浄むるといふ意味において、親鸞とはまた別の意味において、お浄土じやうどと呼びませうか。かういふお浄土感こそ、日本民族の特質(他と比べた特殊な本質)であります。縄文時代(1万6千5百年前～3千年前)は、地球表面一般が石器時代において、縄文土器は実は最先端の文化でした。日本列島は土器が作りやすい自然環境であつたからです。永い縄文時代のものづくり伝統を踏へ、弥生時代(3千年前～1千8百年前)には、中国大陸や朝鮮半島から輸入した水田稲作を、平地の少い日本列島向きに改善し定着させました。1万4千年前に揚子江の南部にて始つた原始の稲作にとり、実は日本列島は不向きな自然環境でした。かなり遅れて、そして改善文化の発達も、必要でした。日本民族の特質たる、茶道・華道・書道・芸道・ものづくり道・武道なども、縄文・弥生時代に原点があります。先述の祖先追想道により綜合すべきでせう。

組織

まづ日本列島から民衆はおたがひを理想へどう組織していきあふか。

ところで、かの60年安保のころに書かれた、『大衆組織の理論』『指導者の理論』といふ著作があります。(文献1、2)

著者の三浦つとむ先生(1911～1989)は民間学者ですが、当時の時代背景、1945年敗戦、49年中華人民共和国成立、54年第五福竜丸事件、60年安保闘争、

といふ時代背景において、民衆運動実践の実力ある指導者でもありました。

ただし、民衆を理想へ組織していくためにこそ、当時の内外左翼を根源から批判する活動家としても登場してゐました。もしもレーニン以降の左翼を批判したいなら、まづ、この著作に学ぶべきでせう。たとへば、『指導者の理論』第二部第三章一二「どういう指導者がきらわれるか」は、民衆運動実践として、今日なほ傾聴に値する、指導者批判です。(わたくしどもへの厳しい反省のためにも。)

しかし今のわたくしは、とくに国家と政治について、尊敬する三浦つとむ先生をも修正する立場に落ち着いてをります。

結局は社会の闘争性を維持する、国家の指導者・運営者ではなく、社会の調和性を促進する、公会創造の指導者・運営者。さういふ、実は今までにほとんど存在しない、指導者像・運営者像の形成こそが必要です。たとへば、出身地や、父母や自分の学校歴や職場歴などが、今の世間において注目されない人であつても、公会創造の運営者や指導者となりうる人は、あるでせう。

諸民族調和へ

諸民族の闘争と調和について考へる際、以下のことが着目点です。すなはち、言語・呪術・宗教・哲学・政治思想・国家と民族意識・部族意識・家系意識と生活様式・生産様式と遺伝配列と自然環境です。20 万年前からのさまざまな自然環境においてどういふ遺伝配列の人間がどのあたりに分布し生活様式ないし生産様式をどう発達させてきたか。それにとまひ言語・呪術・宗教・哲学・政治思想をどう発達させ諸国家をどう発達させ家系意識・部族意識・民族意識もどう発達させてきたか。これらにおける物理の必然と生理の必然と認識理の必然をも理解していきつつ諸民族調和へ創造していく意志と規範を普及していく。

諸民族調和論への研究と教育のため、まづ、現場ないし領域(地域・海域・空域)の問題解決のための調査研究方法を体系的に開拓し始めた。実質的にこれを成したのが、民族地理学の川喜田二郎先生(1920～2009)でした。ただし、川喜田二郎先生には、社会(生産と国家と思想)の本質論が不備でした。この不備を補ふには、国家論の滝村隆一先生(1944～)などに学ぶ必要もあります。

地球表面といふ現場の普遍性がある。たとへば日本列島といふ現場の特殊性と普遍面がある。日本列島内の各種現場の個性と特殊面と普遍面がある。地球表面の普遍性や日本列島の普遍面や各種現場の普遍面を認識してゐるのみでは、日本列島の特殊性や各種現場の特殊面を認識してゐるのみでも、各種現場の個性ある問題を満足に解決することはできない。普遍性・普遍面や特殊性・特殊面の認識とあはせ、各種現場の個性を調査研究する協同方法(KJ法)の体

系的な開拓を、川喜田二郎先生が強調したゆゑです。(文献 22 参照) 諸民族性は各種現場の生活や生産の個性にも根ざしてをり、各種現場の個性ある問題解決を促進することが、やがては、やがては、諸民族調和への道なのです。

生産と組織

軍事・治安警察の自由や資産増殖の自由や病的戦争な架空認識の自由。これらを追求しすぎない人間社会が理想ではないでせうか。

世界は生活と生産と自然と宇宙です。自然は人民のおたがひの生活の場所です。自然より遠くにある世界が宇宙です。

そもそも生産とは何か。

生産の本質は労働により対象を調整しあふことです。ここで対象とは、自然ないし人民のおたがひの生活です。生産とは、労働により、自然ないし人民のおたがひの生活を調整しあふことです。

そもそも社会とは何か。

社会の本質は生産関係です。社会とは自然への生産を介し人民がおたがひの生活を病的戦争にあるいは健康平和に生産しあつてゐる関係です。人民がおたがひの健康平和生活のみを生産しあひうる人間社会が理想ではないでせうか。

そもそも認識とは何か。

認識の本質は感覚と表象と概念の発達です。そして体内の調整をとみなふ認識 (感覚と表象と概念) として目的と意志と規範があります。意志は目的を実現する過程です。規範は主体的な意志の客観的な調整です。わたくしどもはかう規定いたします。

そもそも社会組織とは何か。

社会組織の本質は一定の規範 (主体的な意志の客観的な調整) にもとづいて統一されてゐる人間集団です。たとへば、ある日時のみある場所に約束 (規範) にもとづいて集合した人間集団や、ある売買契約 (規範) にもとづいた個人ないし組織のあひだの取引なども、一時的な社会組織といたしませう。逆に大きな人間集団として、国家も法律や条約といふ規範にもとづいた特殊な社会組織です。

国家よりさらに大きな社会組織として、人間社会といふ生産関係の伝統 (の必然) について調査研究しあひ、人間社会そのものを、人民がおたがひの健康平和生活のみを生産しあひうるひとつの理想 (すなはち自由) の社会組織 (公会) へ、創造していきあふ。それも必ずしも不可能ではないであらう。この理想論こそが、本論の主張にございます。この理想論こそが、生産発達の本質、すなはち生産の伝統 (必然) から創造 (自由) への本質にございます。

そもそも権力とは何か。

権力の本質は社会を指導し運営してゐる規範です。わたくしどもはかう規定いたします。

そもそも権威とは何か。

権威の本質は、過去または現在の、個人または組織が、社会から尊敬されてゐるあり方です。わたくしどもはかう規定いたします。

権力や権威そのものが悪ではありません。

武力や資金力や虚偽力 (虚偽を普及する力) に頼らない、健康平和な現実認識の学問にもとづく教育力による、さういふ未発達の権力や権威。これこそが、善でありませう。

社会の構造はまづ、生産と国家と思想の統一です。国家における政治活動や、思想の表現も、直接に、生産 (労働により対象を調整しあふ) であります。政治活動や思想表現には、生産といふ面があります。

生産関係 (労働により対象を調整しあふ関係) を保護し統制してゐる行政と統治があり、生産関係を促進してゐる現実的あるいは架空的な思想があります。

一定の生産諸関係が一定の生産力 (労働により対象を調整しあふ力) を発育させ、その生産力の発育がむしろ新しい生産諸関係を要請する。かういふ、生産諸関係からの発育と生産力からの要請のくりかへしが生産発達です。

生産様式とは一定時期において生産諸関係からの発育と生産力からの要請のくりかへしにより生産発達してゐる様式です。

一定の思想や政治 (ないし公会創造) が一定の生産発達を促進し、その生産発達がむしろ新しい思想や政治 (ないし公会創造) を要請する。かういふ、思想や政治 (ないし公会創造) からの促進と生産発達からの要請のくりかへしが人間社会発達です。

健康平和な資産増殖闘争といふ生産関係が、ある程度、健康平和な現実認識の労働力 (学問・技能・規律・体力) といふ生産力を発育させ、その労働力の各人なりに〈世界対応の自由の拡張〉もあります。これは資本制人間社会から継承して善い、生産関係と生産力でせう。しかし、資本制人間社会そのものにおいてなぜ、資産格差が拡大するばかりであり、武力や虚偽力に頼るばかりなのでせうか。

労働と休養

いはゆる搾取は、公正な等価交換においてこそ、可能である。実質的にこのことを証明したのが、かのマルクスです。

以下、論理的な順序において解説いたします。

そもそも生活とは何か。

生活の本質は労働と休養のくりかへしです。生活の労働面と生活の休養面が

あります。

人びとの生活に密着する生活の生産として保育・教育・保健 (の運営・指導) ・看護・医療があります。

一方、生産物は、自然の一部といふ対象を労働により調整したものです。いはゆる人工物も生産 (労働により調整) された自然の一部です。

生産は労働により対象を調整しあふことであり、労働には労働対象があります。自然ないし生産物ないし人びとの生活が労働対象です。

人間は労働において道具・機械・仕事着・施設・情報資料などの各種労働手段を用ひ発達させてゐます。労働手段は生産物ないし自然です。

生産における労働対象と労働手段をあはせて生産前提と呼ぶことにします。

休養においては食・衣・住・娯楽教養などの休養手段があり発達してゐます。休養手段は生産物や他の人の労働や自然です。

休養や (人びとの生活に密着する) 生活の生産 (保育・教育・保健・看護・医療) において労働力 (認識力を含む) が養はれます。

生産はすなはち生産前提 (労働対象と労働手段) と労働力 (認識力を含む) の組みあはせです。

消費には休養手段の消費と労働力の消費と労働手段の消費と労働対象の部分的消費があります。

技は技能と技術の統一です。人間の認識と生体の鍛錬による技である技能と、洗練された休養手段や労働手段を用ひる技である技術の、統一です。

人間社会が諸時代諸域の思想や政治 (ないし公会創造) や生産諸関係のもと、〈現実の世界の物理・生理・認識理の現象・構造・本質〉を認識していくにつれ、諸技術や諸技能を発達させてゐます。そして生産力 (労働により対象を調整しあふ力) を発達させてゐます。この生産力の発達がまた新しい生産諸関係や新しい思想や政治 (ないし公会創造) を要請してゐます。

〈価値〉と有益さ

休養手段としての生産物や (人びとの生活に密着する) 生活の生産 (保育・教育・保健・看護・医療) における労働手段としての生産物に至るまでには、さまざまな生産を累積することが多いです。すなはちさまざまな労働を累積することが多いです。その生産物に至るまでの客観的な微細な歴史的関係です。これを〈生産累積過程〉と呼びます。

あらゆる生産物においてその生産物に至るまでの〈生産累積過程〉といふ関係がありその関係のなかに労働連鎖の構造があります。

生産物の〈生産累積過程〉といふ関係のなかにある労働連鎖の構造、これを生産物の〈価値〉と呼ぶことにします。生産物の〈価値〉は人間のおたがひの

労働に着目する概念であり、その生産物の有益さとは区別される概念です。

生産物の〈価値〉はその生産物の〈生産累積過程〉にある労働連鎖であり、生産物の価値量はすなはちその生産物を生産した過去の労働量です。

商品と貨幣

所有する労働や労働力や生産物や自然の一部を商品として交換しあふ商品交換が発達してゐます。ただし、商品交換にまで発達してゐない社会においては人間や生産物や自然の一部の略奪や破壊もあります。

商品交換を経るうちに他のどのやうな商品とも交換しやすい特殊な商品が選ばれてきます。この特殊な商品が貨幣です。現代の貨幣には預金と現金があります。

商品 (労働や労働力や生産物や自然の一部) のさまざまな有益さの区別にかかはらず、商品交換を通して交換されるおたがひの労働量ないし価値量 (過去の労働量) が等しくなることが、素朴な原始人のやうな理想でせうか。

しかし、商品の有益さと商品の労働量ないし価値量が混同されたまま諸商品が交換されてきてゐます。諸商品は貨幣 (他のどのやうな商品とも交換しやすい特殊な商品) の量においてすなはち価格において評価されてきてゐます。

結局、商品の売買は商品の有益さと価格の妥当性について現実的あるいは架空的な討論を経て行はれてゐます。

市場は商品を交換する場所ないし場面です。市場においては、人びとのある種の商品への欲求量 (健康な必要量とは限らない) が、その種の商品の存在量を上まはる場合、高価格がつき、欲求量が存在量を下まはる場合、低価格がつく傾向があります。

いづれにせよ、貨幣以外の商品は貨幣流通を反面にもつことにより社会的に流通します。

必要労働量と剰余労働量

先述したやう、休養や (人びとの生活に密着する) 生活の生産 (保育・教育・保健・看護・医療) において労働力 (認識力を含む) が養はれます。この際の休養手段の労働量ないし価値量 (過去の労働量) と生活の生産にかかはる労働量ないし価値量 (過去の労働量) を総じて、労働力 (認識力を含む) を養ふために必要な労働量、必要労働量と呼びます。

人間の労働力は、労働力自身のための必要労働量より多い量の労働が、可能です。労働力が自身のための必要労働量より多い労働量を実行した場合、実行労働量から必要労働量を引いた差を剰余労働量と呼びます。

現代は商品販売へ向け、労働力商品を必要労働量相当の価格にて購入し、労

働力を組織した労働実行を通して、剰余労働量を集積（いはゆる搾取）する。かういふ資本制生産が発達してゐます。

〈資本〉とは所有する資産のうち剰余労働量を集積するために用ゐられてゐる部分です。ここで〈資本〉は、会計学にて資産は負債と「資本」の和である、と言ふときの「資本」とは区別される概念です。

貨幣を融資して利子を得ることも剰余労働量を集積する一環です。

貨幣を投資して投資先の経営に関与しつつ配当を得ることも剰余労働量を集積する一環です。

金融には融資と投資と寄付があります。

公正な等価交換

さて、確認すると、資本制生産は、商品販売へ向け、労働力商品を必要労働量相当の価格にて購入し、労働力を組織した労働実行を通して、剰余労働量を集積（いはゆる搾取）する、生産様式です。労働力商品の購入は、あくまで、必要労働量相当の価格にてする、公正な等価交換です。国民国家の労働法などにおいて実質的にさう観念されてゐます。マルクスは先達のリカードらの概念混同を克服し、労働力と労働の区別と連関、必要労働量と剰余労働量の区別と連関について解明しました。資本制社会において総じて資産格差が拡大する傾向にあることの、本質的な論理を解明しました。これがマルクスの学問功績です。「自由と平等の市民社会」と観念された資本制社会も、目に触れやすい収奪こそないものの、やはり、剰余労働量を集積する社会でした。

そもそも、決して各民族内や各国家内ではなく、人間社会史における生産様式の最先端を、数世紀単位といふ悠久壮大精度にて論理的に理解すると、貢納制生産→奴隷制生産→封建制生産→資本制生産です。そしてこれはとりもなほさず、剰余労働量を集積する様式の発達史でした。

循環主義

現在、諸国家の税による資産の移転もあり、各民族なりにさまざまな寄付行為もあります。が、人民の健康平和生活への問題解決のためにしか活用されない、そのことが保証されてゐる信用ある寄付。かういふ寄付のみを〈信用寄付〉と呼ぶと、せつかくの資産の移転やさまざまな寄付も、〈信用寄付〉へ集中されず、人間社会を健康平和化していく公会創造には至つてゐません。

なほ、話題のトマ・ピケティ『21世紀の資本』（文献31）にマルクスのやうな論理解説はありません。ピケティ先生らは、資産格差の問題について民主的に討論していくため、客観的な情報整備をなるべく充実させようと努力してをられる。この点はやはり、優秀です。

人民の健康平和生活への問題解決を運営・指導していく〈公会創造事業〉を焦点とし、資本制人間社会における公正な搾取に〈信用寄付〉を調和させていき、人間社会全体において資産が循環する、循環制人間社会へしだいしだいに改善していく。

病的戦争な架空認識の自由や、軍事・治安警察の自由までも動員した、資産増殖の自由の追求しすぎは、地球表面の民衆の声の集結によりしだいしだいに衰退していただきませう。地球表面の民衆の声を集結せよ。資本主義(資産主義)から循環主義へ！ 日光・月光・空気・水・土の健康平和な循環のためにこそ、資産の循環を！

公会創造は、人間社会におけるあらゆる認識を、健康平和な現実認識に、一部は、それが架空認識であると健康平和に自覚した架空認識に、していくことです。これを、未来においてある〈健康平和現実認識協同〉、略して未来協同と呼びませう。公会創造はすなはち未来協同への参画です。指導者や運営者を含む参画者は、健康平和とはどういふことか、ほんたうに現実を認識してゐるか、について、おたがひに自由に批評しあひます。健康平和な現実認識を追究しあふ個人個人の自立こそが望ましいです。

〈寄付込市場制度〉

生産諸関係を形成した改善・改革・変革する特殊な生産(労働により対象を調整しあふ)として提案・通信・金融・運輸・建築の総合があります。これをひろい意味の〈交通〉と呼ぶことにします。〈交通〉は提案・通信・金融・運輸・建築の総合です。

かつて部族国家から外政(外交・通商貿易・軍事)を経て民族が王国化あるいは他民族をまきこみ帝国化すると王国内あるいは帝国内の〈交通〉が促進されました。国民経済圏が発達する前提でした。なほ、経済は商品流通と金融の総合です。

さて、自身の労働力を販売し結果として剰余労働量を寄付するしかない個人ないし家族を労働者階級と呼びます。

(貨幣を含む) 商品売買や融資・投資運用や不動産賃貸や〈資本〉経営により剰余労働量を集積しあふ個人・法人・国家機関を資本家階級と呼びます。

現代の人間社会には労働者階級と資本家階級とその中間の諸階級と、思想や政治にかかはる階級がゐります。

ここに言ふ階級は、近代以前の政治・慣習にもとづく身分制の意味ではない、客観的な資産格差の階級です。

労働力の養成と有利な販売を目的として協同する各種組織があります。それに対抗する各種組織もあります。これらを中心として生産的階級闘争がありま

す。

諸国家は内政において統治領域内の生産的階級闘争をそれなりに調整してきました。

それとともに諸国家は外政において人間社会規模の政治的階級闘争をしてきました。

近年の〈交通〉(とくに通信・金融・運輸)の発達により人間社会規模の生産的階級闘争が発展してゐます。諸国家は外政において人間社会規模の政治的階級闘争をしてきた、内政において統治領域内の生産的階級闘争をそれなりに調整してきた存在です。諸国家も各種国家連合も近年の人間社会規模の生産的階級闘争を本質的に調整できる存在ではありません。

国家や国家連合に頼らず、わたくしどもが〈公会創造事業〉を提唱するゆゑんです。

健康平和な資産増殖(搾取)闘争があつても、〈信用寄付〉も組織し、人間社会全体において資産が循環する、すなはち階級循環の、〈寄付込^{こみ}市場制度〉の創造です。要点は寄付一般でなく〈信用寄付〉。人民の健康平和生活への問題解決のためにしか活用されない、そのことが保証されてゐる信用ある寄付、です。「貧民や後進民族や不平不満者の武力への寄付」であつてはなりません。非暴力(アヒムサ)の精神の普及です。

なほ、たとへヨガなどの健康平和文化をひろめたかつたとしても、社会認識が甘く、社会改善の過程じたいを健康平和に推進できなかつた、かのオウム真理教事件。むろん、誤りでした。

円

諸国家の諸法律のもと銀行からの貸付金として個人・法人・国家機関の口座に預金を設定する労働量ないし価値量は、その預金額が交換できる労働量ないし価値量と比べ、きはめて少いです。諸国家の諸法律のもと銀行などが発行し流通させる現金といふ生産物の価値量(現金といふ物体を生産した過去の労働量)は、その現金額が交換できる労働量ないし価値量と比べ、きはめて少いです。ただし、預金・現金を安全・安心に流通させるための統治・行政にかかはる労働量ないし価値量もそれとは別に必要です。

預金・現金といふ貨幣(特殊な商品)は他のすべての商品交換を仲介してゐる限り預金・現金を設定・生産し安全・安心に流通させる労働量ないし価値量じたいがきはめて少くても問題は生じません。

問題は人間社会規模の剰余労働量の集積を預金・現金にて行ひそれを人間社会の貧困階級の健康平和生活のために有効還元しないところから生じます。

商品が過剰にあり市場において交換されにくい事態もあります。今は諸通貨

といふ特殊な商品が過剰にあります。人間社会規模の剰余労働量の集積を諸通貨の預金・現金にて行ひあつた結果です。

まづは円といふ預金・現金の貨幣機能および健康平和信用を高めていきたいです。貨幣機能とは〈(為替を含む) 決済の利便性／交換労働量 (貨幣をどれだけの労働量と交換できるか) の安定性／所有の安全性／供給と流通の必要充分性〉です。健康平和信用とは、円であれば健康平和商品が安く買へ〈信用寄付〉も充実してゐるといふ信用です。

19 世紀のポンドや 20 世紀のドルは、預金・現金の設定・発行の額が大きく、諸決済において用ゐられる地域が広くかつ額が大きい。かういふ意味における、基軸通貨でした。人間社会の統一市場を形成するためでもありました。

さて、日本国が最大の債権国であつても、21 世紀の円が、19 世紀のポンドや 20 世紀のドルと同様のあり方における基軸通貨となることは、ありえないでせう。

そもそも貨幣は、商品交換が発達するうちに、あらゆる商品交換を仲介しやすい特殊な商品として、発達し自立した。これからの諸民族調和時代の円は、通貨交換 (為替) が発達するうちに、あらゆる通貨交換を仲介しやすい特殊な通貨として、発達させ自立させたらよいのではないでせうか。いはば〈仲介・調整機能としての中央通貨〉を追求することが善いのではないでせうか。

円を食糧需給・エネルギー需給・資源需給・諸通貨需給を安定させていく〈中央通貨〉として自立させていく。

また、経済の根本として、今までの供給体制にとつての有効需要を探すのではなく、これからの健康平和な需要にとつての〈有効供給〉を開発してまゐります。すなはち供給体制を再編してまゐります。逆ケインズ経済学です。

なほ、「電子マネー」について。わたくしも使用してゐる交通機関係の「電子マネー」は当初はその交通機関のためにしか使へない、つまり前払金でした。が、今はそれが交通機関・コンビニ・スーパー・喫茶店・レストラン・書店その他にて使へる。実際にどこにて使ふかあらかじめ不定であり、法律上はともかく、これはひろい意味の預金となりました。

インターネット

一種の不満発散かもしれませんが、今のインターネット上のやりとりがつかかりする面もあります。人間、おたがひに嘲笑しあつてゐるだけなら、むなしだけです。

そんなことより、インターネットのサイトにおいてまづ、日本語にて〈学問と規範と芸術と保健の中心〉を建築したいものです。それが従来都市機能の一部を代替し、どこにゐてもその機能を活用できるやうになります。都市の過

密と地方の過疎の改善も促進されるでせう。といふより、それも意図してサイト建築を試みたいものです。(たとへば各地方の歴史探究について通信会議するなど。)

そして記録内容の検索は形式検索 (ABC 順やあいうえお順など) からしだいしだいに内容検索 (適正な内容分類により検索) へ移行させたいものです。むろん、簡単なことではありません。まづ学問本質論が必須だからです。

しかし、たとへばわたくしのやう、世間体にもとらはれず、健康平和な現実認識を追究する悦びに味をしめた者は、内容検索こそが認識の保健であり、今のやうな形式検索の過剰は認識の健康に好くないと、強く感ずるやうになります。先の悦びにより、まづ状況感を欲する、原始人のやうな純情さも、復興させるからです。

さて、加へて商品情報です。

特殊な商品として貨幣と労働力があります。それ以外の商品を、通常商品と呼びませう。貨幣そのものではないが、貨幣の融資や投資にかかはる、融資証券や投資証券は、通常商品に含めませう。

労働力 (といふ商品) と通常商品と貨幣 (といふ商品) の存在と要望について、情報陳列の整備をしていきたいものです。

また、〈社会環境・自然環境の未知の変化に自在に対応できる、認識ないし言語規範の構造や、情報の社会的記録の構造〉の研究開発も必要です。

まもなく「明治 150 年」となる近代日本・東京都・首都圏といふ文化を、縄文時代からの歴史を反省しつつ相対化し、日本列島の各地方の文化的自立を試みることが、これからのいはば教養経済 (教養のための商品流通と金融) にとつても、好ましいのではないでせうか。

地球表面に対する統治・行政や経営における領域ないし区域設定は、通信・金融・運輸などの技術発達により、変化すべきものでせう。明治の廢藩置県当時の合理性をも十分に理解しつつ、これからの合理性をも進取に設定すべし。

究極の目的

少子高齢化対策の本質は、恋愛・出産・保育・教育・保健・看護・医療の最高品質最低費用を追求する、さういふ事業ないし産業における改善努力ではないでせうか。「成長戦略」なんぞと時代遅れのことばも聞きますが、日本社会の生産において次に可能であり必要な、事業ないし産業の創造努力は、人民の健康平和生活そのものの質と効率の改善です。今の流通や IT や行政などの延長に、それを展望すべし。かういふ、まさに人間社会の究極の目的こそが、わが日本社会において残されてゐるのです。すでに残されてゐないものを追ひかけて「成長戦略」を夢想しても無駄です。民衆の日常の健康平和とそれなりの

教養を重視する。さういふ民衆重視文化が、実は日本民族はまだ弱いのではないでせうか。

恋愛ないし男女関係に関しては、縄文時代からの日本列島におけるとくに民衆の男女関係は時代により地方によりそれなりに変化してきたのでせう。しかしとくに明治維新以降と敗戦以降において、前代（江戸以前）民衆的男女観と、儒教的男女観やキリスト教的男女観との、区別と連関が、十分に思索し情念されてゐない。まだこころの整理がついてゐないでせう。ならば、こころの整理そのものを事業化できないでせうか。

そしてまた、会議・競技・観光・移民受入れなどを通じた諸民族調和への研究も、進取に取り組むべき事業ないし産業でありませう。

人間社会史における呪術・宗教・哲学・政治と健康平和な現実認識の伝統と創造において、個人個人のわが人生はわが生活は満足ゆくものであるか。さういふ意味の人生の質ないし生活の質を問うたとき、かういふ問題を社会全体においてひとまづ懸案にしたままのとくに敗戦後日本人のこころには、一定の荒地が残つてゐるのかもしれない。

地球表面において市場拡張可能性（いはゆるフロンティア）が無くなりつつあります。かつて鎖国により市場拡張可能性を人為的に断ちきつた、わが江戸時代の日本列島内における創意工夫のあれこれに、これからの人間社会全体が学ぶべきものもありませう。

チェーンストアにしても、ITにしても、〈それを民衆が使用し購買する生理〉といふものがありませう。そしてそこに各民族の本音も反映するのかもしれない。

指導と運営

公会創造は皆みなさまの生体と情感と情念と思考に〈思考と生体と情感と情念の順〉において指導させていただきます。

思考統合の学問発達体へ学問協力の思索先導をさせていただく学問指導部があります。

生体協力の生産調和体へ生産企画の思索先導をさせていただく生産指導部があります。

情感安定の道德共同体へ道德推進の思索先導をさせていただく道德指導部があります。

情念融和の民衆通信へ民衆仲介の情念先導をさせていただく民衆指導部があります。

情念融和の政治解消世論へ政治解消指令の思索先導をさせていただく政治解消指導部があります。

学問・生産・道徳・政治解消といふ四指導部による思索先導へ皆みなさまからの批評（質問・意見・修正案）は自由です。それを民衆指導部による情念先導も応援いたします。その情念先導へ皆みなさまからの反発も自由です。公会指導部の思索と情念に盲点はないか調査するため皆みなさまから批評や反発をいただきます。

皆みなさまの健康平和生活への問題解決へ個人個人や私的協会（家庭と同好会と職場）はどうあればよいか。調査研究と会議のためふさはしい区域に学問協会・生産協会・道徳協会・政治解消協会といふ公的協会を設けてまゐります。それぞれの公的協会運営部による司会と事務のもと、学問協会は学問と民衆の指導部が生産協会は生産と民衆の指導部が道徳協会は道徳と民衆の指導部が政治解消協会は政治解消と民衆の指導部がそれぞれ助言させていただきます。

運営と指導において各種現場の個性と特殊性と普遍性、これらの区別と連関を整理し、統一性と効率性を追求いたします。

協同

〈公会創造事業〉は、人民の健康平和生活への問題解決を運営・指導していく事業です。ひろい意味のサービス事業であり、最終のチェーンストア事業でもありませう。既成の諸産業・諸事業を統一していく、事業でもあります。わたくしどもは渥美俊二先生 (1926～2010) の『21世紀のチェーンストアチェーンストア経営の目的と現状』（文献48）などにも学び続けてをります。〈公会創造事業〉といふ人間と社会の必要の根幹について研究してまゐります。

わたくしどもは、一定思想を強制する組織では、断じてありません。新興宗教や、昔のソ連共産党などとは、無関係です。ただし、〈健康平和な現実認識の道徳〉といふものも可能ではないか、と考へ、提案させていただいていきます。（文献57参照）その提案にどう対応されるかは、皆みなさまの自由です。いづれにせよ、わたくしは人間社会全人民を尊敬させていただきます。おひとりおひとりなりに健康平和生活を追求しあふ自由があるからです。わたくしは、今の世間において名誉とされてゐる学校歴や職場歴などにもあへてこだはず、何か適当な人生観・社会観・世界観の範囲において徒党を組むことをも敬遠し、健康平和な現実認識のみを追究してまゐつたつもりでございます。（ひろい意味の〈出家〉でした。）人間社会にある諸矛盾を解決したいためでございます。

公会創造への規範（文献53）と概念（文献58）を提唱し、一方、皆みなさまの健康平和生活への問題解決を運営し指導させていただきつつ、わたくしどもの思索や情念と皆みなさまからの批評（質問・意見・修正案）や反発のやりと

りをさせていただく。このための調査研究と会議を通信や面会や集会や合宿などを通してひろめ深めていく。かういふ事業を興してまゐります。わたくしどもと皆みなさまとの協同なのです。あらかじめ何らかの「都市計画」なんぞがあるわけではございません。探検と情念と思索と問題解決の協同です。とくにこれからの若い女性や男性には生活の現場からこそ公会創造の苦勞と悦びといふ、究極の大志大欲をいただいていたきたいものです。まづ日本国民のひとりたる山田 学、まうひとつの公共としてここに自立いたします。今の世代とくに若い世代は、実に有史以来の〈公会創造事業〉の可能性に立ち会へてをります。かのマルクス、エンゲルスの時代は、一部空想まじり必至の、学問・思想の創造のみが可能でした。レーニン以降は、論外です。(文献 24 参照)

概念 (学問) としては、脱デカルト路線です。近代社会の学問は、デカルトに象徴される、数学の偏重路線です。しかし、数学は、量とかずと図形といふ、世界の部分についての学問です。本論の主題である、人間社会そのものの社会組織化において、規範 (主体的な意志の客観的な調整) を含む認識についての認識学がまづ重要であり、そしてあらゆる問題解決に対応するため学問本質論 (世界学本質論と科学本質論) が重要です。国家や国家連合が貧民や素朴民族の健康平和生活へまともに対応できてゐない現状の一因は、数学の偏重路線なのです。

〈交通〉の再編

〈公会創造事業〉の發達は、すなはち、公会創造への指導と運営 (公会指導と公的協会運営と私的協会運営) のための〈交通〉 (提案・通信・金融・運輸・建築) の開發です。

これが、既成のさまざまな組織や交流へ浸透していき、さまざまな組織や交流を再編してまゐります。

諸国家といふ組織についても、とくに民間に近い部分から、しだいしだいその機能と構造を縮小させ、最終的には、止揚 (内容は保存するとともに形式は否定) いたします。

〈公会創造事業〉の發達を保護・推進するとともに、各国家機関をしだいしだいに縮小し解消していく、〈各国最終政治活動〉も組織してまゐります。

資産増殖のための〈交通〉から健康平和研究のための〈交通〉へ再編してまゐります。

公会指導部は学問・生産・道徳・民衆・政治解消といふ五指導部がそれぞれ自立し相互指導いたします。学問部が規範と概念と人事を他四部に指導します。生産部が労働と財務を他四部に指導します。道徳部が公私分離と規範保持を他四部に指導します。民衆部が情念通信と軌道修正を他四部に指導します。政治

解消部が運動保護と健康平和解放を他四部に指導します。学問部が国民国家の立法を止揚していき生産部が執行を止揚していき道德部が司法を止揚していき民衆部が世論ないし選挙を止揚していき政治解消部の目的達成に協力します。

虚偽力

この3百年間は実は、健康平和な資産増殖闘争より、病的戦争な資産増殖闘争に重点があり、マスメディアと議会制民主主義の社会にあり、一定の内実を封印するため、いはば虚偽力も発展してゐるのです。

今の社会に普及してゐる、とくにこの3百年間についての歴史説明は、多かれ少かれ、諸権力・諸権威の都合にあはせて創作されてゐます。とくに、武力革命や諸国間戦争などを媒介した、軍事金融や秘密結社などについて、封印されてゐます。いずれはそれらも明るみになるでせうが、民衆が安易に興味本位にて調査することは、危険でもあります。

しかし、現実の非情さに耐へきれなかつたあるスパイが、一端をもらし始めてもゐます。

高橋五郎『原爆奇譚今明かされる“究極の原爆の秘密”』といふ著作があります。(文献40) 第二次大戦において枢軸国側にも連合国側にも通ずる〈高みの見物〉のイエズス会のスパイがゐました。表向きはナチスのスパイでありヒットラーに対する監視役であり昭和天皇にも通じてゐました。ユダヤ系スペイン人のベラスコです。原爆をめぐるドイツと日本の驚愕の内実を、長い交流の高橋五郎先生 (1940～)に示唆し、高橋先生がそれについて他情報も集め推理しました。詳細は同著を直接お読みください。

公会創造社

縄文人の、まだ戦争も知らない、純情さを復興する。現代社会の水面下にある極悪非道な情報戦をも深く認識しつつ、それを克服していく規範と概念の組織のもと、縄文人の純情さを復興する。これを縄文^{縄文}るねっさんすと呼ぶ。

わたくしどもは公会創造社・JOMON ^{縄文}あかでみいです。公会を創造していきまうひとつの公共の組織であり、そのための規範と概念を指導し運営する組織であり、いはば最終の結社であり、縄文^{縄文}るねっさんすのための組織です。

現行法律上は、任意団体です。ただし、そのうちの生産協会運営部のみを、NPO法人とするやう、検討中です。いはばNPO法人の核心とするやう、検討中です。

わたくしどもも、諸国家はじめ既成の諸組織の立場としてではなく、公会創造社といふ新しい立場として、情報戦(調査解析・封印・広告・運動)を展開してまゐります。

諸民族伝統も踏へ、公会創造の実務にふさはしい公会創造社の拠点^を諸域に建築してまゐります。

たとへば英語と日本語の区別と連関、IT と KJ 法 (先述) の区別と連関を本質的に理解していきつつ、IT 全般を改善していきたいものです。わたくしの研究事務はひろい意味の KJ 法の適用です。

3.11 以降に強く自覚された原発問題をどう解決していくのか。わたくしどもの考へは文献 54 をご覧ください。

わたくしどもが〈公会創造事業〉まで発想したのは、わたくし個人の特異な問題を解決していくためなものでした。山田俊郎先生 (1926 ~ 1996 / わたくしの実父) が開拓した、生理的物理学方面の根幹技術について、これの学問化と社会化といふ問題を解決していくためでした。それを日本社会のものづくり進化として述べたのが文献 55 です。

西欧近・現代の物理学や生理学もまだ、一面的ではないのか。たとへば縄文人が土器・土偶に表明したと考へられる、生理感覚ないし物理感覚などとの、区別と連関。じっくりじっくりこれを解明していつてこそ、はじめて、全面的な現実認識の生理学ないし物理学が将来において確立するのではないか。今の学問権威とは異質な、かういふ問ひかけを抑制できぬのが、わたくしどもの生活や生産の現場にございます。

なほ、喫緊の課題として、地震の本質や構造はまだわからないところがあつても、地震の現象についての予測は、それなりに向上してゐるのではないでせうか。文献 52 その他の試みもあります。

さて、日本経済は GDP や売上・利益・資金繰りにとらはれるより、まづ公会創造への研究開発が重要ではないか。学問 (本質論・構造論・現象論) 開拓や技能・技術開発や商ひ開発を総合した、研究開発の職場を、NPO 法人その他により創造していくべきではないか。

遠く北極星を見つめるやうな、本論の立場に達観すれば、日本社会は目標がみえないどころか、なしていきうること、なしていくべきことがあまりにも多いと、悟られるのではないでせうか。日本社会といふ生産の最先端社会においてこそは、従来の発想にとらはれてゐる限り、なるほど、目標はみえません。認識の転換こそが必須です。

人民の健康平和生活のためには、近代日本の、福沢諭吉先生の脱亜入欧教育の成果も踏へつつ、その一面教育を克服すべし。庄司和晃先生 (1929 ~ 2015) は民俗学の柳田國男先生から直接のご指導も受けられ、前代教育 (江戸以前の教育) を再評価することの重要性を悟られ、維新以降の学校教育も深く承知しつつ、全面教育学を創始し深めてをられます。(文献 14、15、59 参照)

憲法改正

日本国は米国・中国・露国などとの外政関係、すなはち情報戦・外交・軍事・通商貿易・金融政策をどうしていくか。これについて日本国は、かの幕末・維新期より重大な判断・決断・執行を迫られてくるでせう。それといふのも、幕末・維新期の志士たちの活動の背後に実は、英国などの情報戦による支援があり、日本民族として自立した体制変革ではなかつたからです。しかし今回は、いよいよ、日本民族として自立した判断・決断・執行が迫られてきます。そのための能力ある人格がとても少なく、しかも社会のあちこちに分散してをり、まだ組織されてゐません。まづ、かういふ危機にあることを、日本国民は早く自覚する必要があります。

まづ、諸事態をなるべく平和に進めるためにも、情報戦です。信長・秀吉・家康のころや、戦中の陸軍中野学校など、日本民族にも優れた情報戦能力があつたが、今は世界の実状に比べ、著しく遅れてゐる、と聞きます。世界の実状を知るある方から、かういふ意見を聞きました。すなはち、「日本国はまづ、諸国家・諸組織の情報機関による情報を高額の金銭により購入せよ。」それにより、世界の情報戦の実状のとてつもない厳しさを自覚することから始めよ、といふことでせうか。

そして憲法改正について言へば、〈現行憲法の当初の平和思想をさらに現実的に強化する方向の憲法改正〉こそが、必要でありませう。70年前とは異質な世界情勢（水面下に封印された内実を含む）にまともに対応しつつ、現行憲法の当初の平和思想をさらに強めた、〈公会創造事業〉を保護し推進するためです。新しい日本国は、統治（外交・通商貿易・金融政策・軍事・治安警察）の自立と行政（それ以外）の地方分権化が必要です。逆に尋きます。すでに内閣法制局などが黒に近い灰色に「解釈」した現行憲法にて〈健康平和理念〉を守りうるか？ 2千5百年前に東アジアにて規範と概念を整理した孔子が、善い意味においても悪い意味においても、わたくしどもの健康平和研究の対象にございます。

文芸化

以上の思索を情念として皆みなさまによりわかりやすく文学ないし芸術としても表現していきたいものです。たとへば吉本隆明先生 (1924～2012) の文芸観にも学びつつ。日本民族は実は民衆こそが強いのでせう。

世界は体内と体外と認識じたいです。体外を認識し認識を反省し体内の要求のまま生活する。これが客体に対応して主体を解放することでありませう。

[文献] 本論を構築するにあたり、そしてさらに具体化していくため、わたくしどもは、以下の諸著作に学び続けてをります。これらの諸著作には学ぶべきものが多く含まれてゐます。ただし、書かれた時代の制約などもあり、一部、今となつては同意できない内容も含まれてゐます。それらの詳細については、機会があれば、論じませう。日本社会の意外なところにある優れた恵まれた出版環境に感謝申し上げます。わたくしが 16 歳の時から気ままに探検した結果の、教養の掘出し物の紹介でもあります。〈公会創造事業〉の準備は、海外のどこでもなく、まさに日本社会においてすでにわたくしどもの九先達(本文にて.....を付した先生) においてあります。指導・運営における分類(敬称略/分類責は山田) は皆みなさまの生活から近い順に沖 正弘(道徳指導)・山田俊郎(生産運営)・川喜田二郎(学問運営)・庄司和晃(道徳運営)・高橋五郎(政治解消運営)・吉本隆明(民衆指導)・渥美俊一(学問指導)・三浦つとむ(生産指導)・滝村隆一(政治解消指導)です。なほ、わたくしが豊かに面識をいただけてゐる先達は実は少く、山田俊郎(実父) 以外は主に著作を通して学ばせていただいてをります。九先達の区別と連関の解明がわたくしどもの思索と情念でございました。いはば日本民族の集結でございました。日本文明の種子です。イギリス人も、アメリカ人も、中国人も、確かに、賢い。ただ、その上に「ずる」がつかないであらうか。

- 1 三浦つとむ『大衆組織の理論』(勁草書房改訂版 1961)
- 2 三浦つとむ『指導者の理論』(勁草書房 1960)
- 3 三浦つとむ『認識と言語の理論 第一部』(勁草書房 1967)
- 4 川喜田二郎『環境と人間と文明と』(古今書院 1999)
- 5 川喜田二郎『素朴と文明』(講談社 1987)
- 6 川勝平太『文化力日本の底力』(ウェッジ 2006)
- 7 日本未来学会編『宗教の未来』(東京書籍 1994)
- 8 沖 正弘『生きている宗教の発見だれでも悟り救われる沖ヨガ修行法』(竹井出版 1985)
- 9 安田喜憲『一万年前気候大変動による食糧革命、そして文明誕生へ』(イースト・プレス 2014)
- 10 松本克己『世界言語のなかの日本語日本語系統論の新たな地平』(三省堂 2007)
- 11 斎藤守弘『神々の発見超歴史学ノート』(講談社文庫 1997)
- 12 寺沢 薫『日本の歴史 02 王権誕生』(講談社学術文庫 2008)
- 13 綾部恒雄監修・福田アジオ編『結社の世界史 1 結衆・結社の日本史』(山川出版社 2006)
- 14 庄司和晃『柳田民俗学の子ども観』(明治図書 1979)
- 15 庄司和晃『全面教育学入門渡世法体得という教育本質観』(明治図書 1994)
- 16 吉本隆明『詩人・評論家・作家のための言語論』(メタローグ 1999)
- 17 吉本隆明『アフリカの段階について史観の拡張』(試行社 1998)
- 18 吉本隆明『改訂新版共同幻想論』(角川文庫 1982)
- 19 沖 正弘『ヨガ総合健康法沖ヨガの考え方と修行法(上)』(地産出版 1976)
- 20 沖 正弘『あなたも自分で異常が正せる 呼吸体操によるヨガ修正行法』(日貿出版社 1978)
- 21 沖 正弘『修行療法の原点生命力強化法』(日貿出版社 1981)
- 22 川喜田二郎『KJ 法渾沌をして語らしめる』(中央公論社 1986)
- 23 三浦つとむ『弁証法はどういう科学か』(講談社現代新書 1968)
- 24 三浦つとむ『マルクス主義の復原官許マルクス主義の批判と克服』(勁草書房 1969)

- 25 三浦つとむ『マルクス主義と情報化社会』(三一書房 1971)
- 26 田畑 稔『マルクスとアソシエーションマルクス再読の試み』(新泉社 1994)
- 27 田畑 稔『マルクスと哲学方法としてのマルクス再読』(新泉社 2004)
- 28 マルクス『経済学・哲学草稿』(長谷川 宏訳・光文社古典新訳文庫 2010)
- 29 マルクス『経済学批判』(武田隆夫・遠藤湘吉・大内 力・加藤俊彦訳／岩波文庫 1956)
- 30 マルクス『資本論(一)～(九)』(エンゲルス編・向坂逸郎訳／岩波文庫 1969 ～ 1970)
- 31 トマ・ピケティ『21 世紀の資本』(山形浩生・守岡 桜・森本正史訳／みすず書房 2014)
- 32 水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』(集英社新書 2014)
- 33 浜 矩子『「通貨」を知れば世界が読める “1 ドル 50 円時代” は何をもたらすのか?』(PHP ビジネス新書 2011)
- 34 増田悦佐『戦争とインフレが終わり激変する世界経済と日本』(徳間書店 2014)
- 35 増田悦佐『城壁なき都市文明 日本の世紀が始まる』(NTT 出版 2014)
- 36 滝村隆一『国家論大綱 第一巻 上・下』(勁草書房 2003)
- 37 滝村隆一『国家論大綱 第二巻』(勁草書房 2014)
- 38 滝村隆一『ニッポン政治の解体学』(時事通信社 1996)
- 39 高橋五郎『天皇の金塊』(学習研究社 2008)
- 40 高橋五郎『原爆奇譚今明かされる “究極の原爆の秘密”』(学研パブリッシング MU NONFIX ・ 2015)
- 41 北野幸伯『日本人の知らない「クレムリン・メソッド」世界を動かす 11 の原理』(集英社インターナショナル 2014)
- 42 落合莞爾『南北朝こそ日本の機密現皇室は南朝の末裔だ』(成甲書房 2013)
- 43 菅沼光弘『菅沼レポート・増補版守るべき日本の国益』(青志社 2012)
- 44 孔祥林総編集『日中英対訳 新版 論語』(人間・自然・科学研究所 www.hns.gr.jp / 2002)
- 45 広井良典『人口減少社会という希望コミュニティ経済の生成と地球倫理』(朝日選書 2013)
- 46 三浦 展『第四の消費つながりを生み出す社会へ』(朝日新書 2012)
- 47 金子仁洋『地方再興官と族議員は地方の敵にまわるか』(マネジメント社 2007)
- 48 渥美俊一『21 世紀のチェーンストアチェーンストア経営の目的と現状』(実務教育出版 2008)
- 49 渥美俊一『新版 商業経営の精神と技術』(商業界 2012)
- 50 原 丈人『増補 21 世紀の国富論』(平凡社 2013)
- 51 濱野智史『アーキテクチャの生態系情報環境はいかに設計されてきたか』(NTT 出版 2008)
- 52 村井俊治『地震は必ず予測できる!』(集英社新書 2015)

本論の解説を補助する拙文として JOMON あかでみいサイト www.jomaca.join-us.jp に以下があります。

〈健康平和研究〉画面内

- 53 〈提唱・人間社会規範〉
- 54 〈原発問題は、祖先追想道から〉
- 55 〈ものづくり進化論〉

「理念集」画面内

56 〈わたくし紹介〉

57 〈健康平和生活への道〉

58 〈学問本質論〉

「店頭」画面内

59 『生きることわざまんだらよ』(文章と図解)

わたくしには、いはゆる左翼への情念も、右翼への情念もあります。

※ 55年前の6月15日の権 美知子さんの死を追想しつつ。

おもしろうてやがてむなしき資本主義。

※ 沖 正弘師没後 30年 (2015年7月25日) を近くに意識しつつ師の文言を再確認いたします。

「終戦を境にして私の心は百八十度変り、人類の争いに対して大反省の心が起りました。なぜ戦争が起るのだろうか、戦争をしないようにするにはどうしたらよいのだろうかと深く考え、そこで再びガンジー聖師の平和思想を学び直す心になりました。そして戦争の問題を考えたときに、私の気づいたことは、全人類は懺悔心(おわび心)と愛し合う心を持たなければ救われないということでした。お互い同士がわびあうのです。兄弟でなぜ戦わなければならなかったのだろうか、とわびあう気持を持たなければ救われる道は開かれません。」(文献8の30ページより)

※ 右も、左も、ない。

2020年東京オリンピック・パラリンピックにて諸民族調和へのおもてなしを。

そして恵まれた日本列島から次の社会を。

未来協同へのご参画を。